

14
600
218

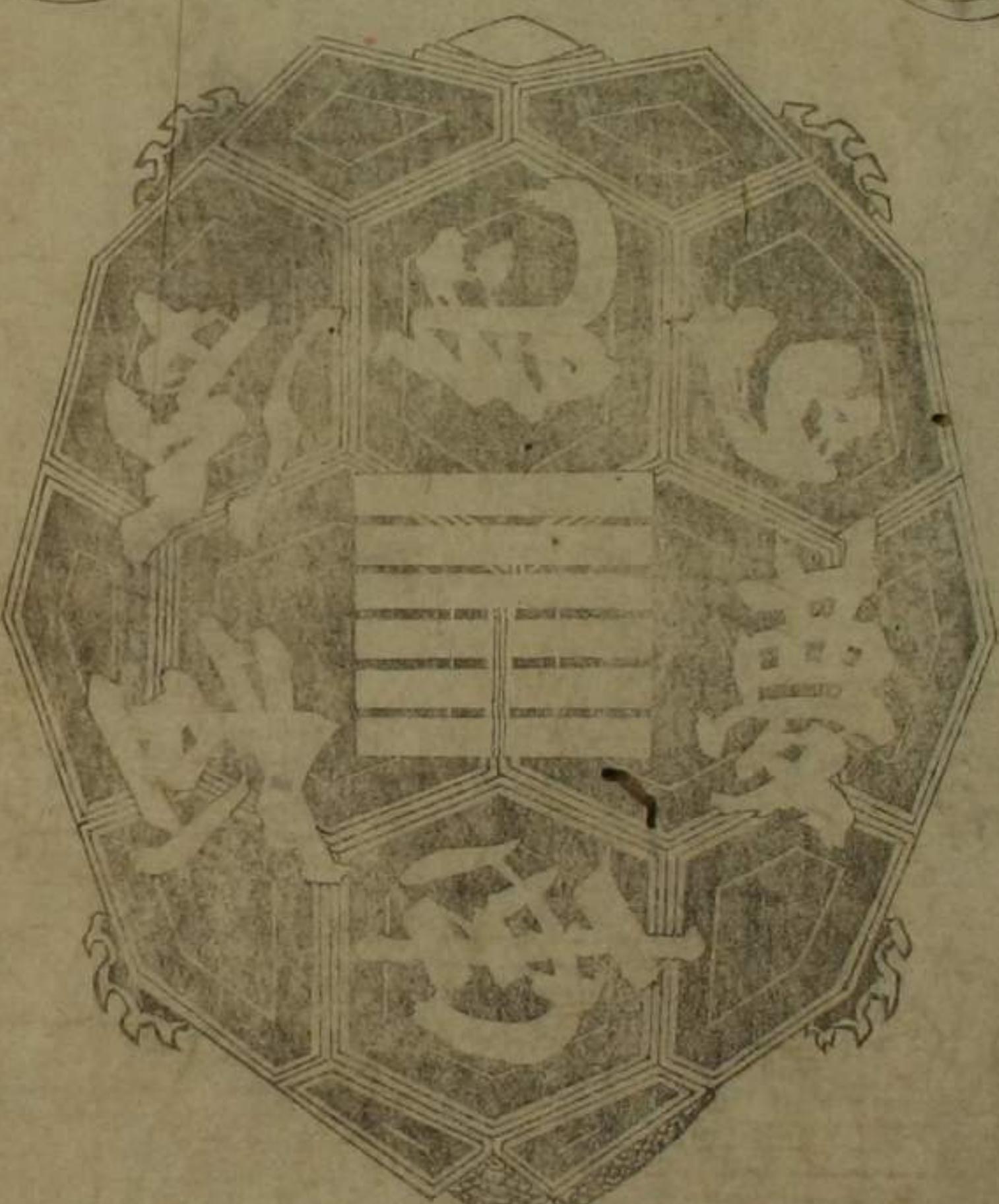
壬申發兌

曲亭主人著

三七房傳

國字小說

木蘭堂繡梓



全本八冊

萬葉北齋畫

開元七年，道士呂翁者，得神仙術，行邯鄲道中，
息郎舍，隱囊而坐。俄見少年盧生，衣短褐，乘青
駒，亦止郎中，與翁言笑。盧生顧其衣裝穢，乃歎
曰：「大丈夫生世，不諧困如是也。」翁曰：「子談諧方
適，而歎其困何也？」生曰：「吾常志于學，自惟青紫
可拾，今已過壯，猶勤畎畝，非困而何？」言訖而目
昏思寐。時主人方蒸黍，翁乃探囊中枕，以授之。
曰：「子枕吾枕，當令子榮適如志。」其枕青磁而寢。

列本作同
同州一

其兩端。生俛首就之。見其竅漸大明。乃舉身而入。遂至其家。數月娶清河崔氏女。女容甚麗。生質愈厚。明年舉進士登第。釋褐轉渭南尉。俄遷監察御史。轉起居舍人。知制誥三載。出典同州。遷陝牧。移節汴州。領河南道採訪使。徵為京兆尹。是歲神武皇帝方事戎狄。除御史中丞河西道節度。大破戎虜。歸朝冊勲。恩禮極盛。轉吏部侍郎。遷戶部尚書。兼御史大夫。爲時宰所忌。以飛語中之。貶端州刺史。三年徵為常侍。未幾同

滅惑滅
字偽

中書門下平章事。同列復誣與邊將交結圖不軌。下制獄中官為保之。滅死授驩州。數年帝知寃。復進爲中書令。封燕國公。生五子。有孫十餘人。後以年逾八十病薨。盧生欠伸而寤。見其身方偃於邸舍。呂翁坐其傍。主人蒸黍未熟。生蹶然而興曰。豈其夢寐也耶。翁謂生曰。人世之適亦如是矣。生慚然良久謝曰。夫寵辱之道。窮達之運。得喪之理。死生之情。盡知之矣。此先生所以窒吾欲也。敢不受教。稽首再拜而去。右沈旣濟枕中記

蕉窓月を引て景壁を射てや、也秋蛩
牕中鳴て吾夜のうすむよ静く林よ暮る
身とも塵を拂ひてかゝよ書を積ども披くと
禱りてこの時や客乃榮門を敲くたゞ酒の爐
邊よ煖る外し膳らんとするふいと寝らま候れ
隠て坐し天を仰ぐ嘘次よまざとの鶴を衆
じる故よ井枯木乃如くすよ院心死灰よ似ばと
下を聊吾生を樂むよ足まよ俄見浮雲月よ

顔一乞孤燈の明りをや見え檐馬稀よ拂
夜の深く深く夜ぢゑむる是馬猿を辭虚よ
繋て聲色の歎も一やひてどと、やひて智を忘
と能く鵬鯤を逍遙よ伴ふて小大乃利と争
すゆいと、いと名を捨てと能く蔑視よ呵し
革を弄し意を費く、誠を醸く羅貫三世
乃精紫女墮獄乃悔豈身後の談ひんや生涯
風流文墨乃奴とする因果巒々くり正後書を
贈るをみて終日不言。遂に精よ心もあつば。

鬼話を演輪回を説是墮獄の悔あはよの處
父母苦を生むゝれ室^{アム}如此にて身を済^スを
も可^シきん也勢已^シとを得^シの書賣
木蘭堂常南柯夢の続編を版せんと請ふれども
彼篇ハ既^ニ全く局を結^ミ絶^ミ一物を達^フば當
を續^フとも勞^フて功^フ夫流渴^ミ飲をりしも
トは^シ薪^ス井^スを穿^カ月没^ス明^ク水^ス
更^ニ燭^ス点^カ不^可推^シと^シ聽^カ
頤^シ彼^ノ木蘭書賣^ハ旦暮^ニ南柯^ノ下^ニ坐^カ偶

兎^スを獲^カひよの宣^カ株^スを守^ルと^シ寝^カ
守^ルの癡^チアリ^カ作^カの株^スを作^カ
遂^ニ編^ス嗣^ス藁^スを脱^カも^シとの欲^ス先^カ題^ス
南柯後記^ト亦^シ再^カ寢^カの夢物語^を鄭^ノ
薪^ス者^スが^シ鹿^ス擬^カ若^ス鄭^ノの客人^ヲも^シを聞^カ
夢殿^ノ先生^モこれ^ト取^ラ書^カ必^シ免^スを捨^カ
亦^シいちもん^シ鹿^ス獲^カ廻^カ

文化辛未立秋の日

曲亭主人識



南柯行記

白夢南柯後記總目錄

前帙四冊

南柯の接木

千日夢後

詐偽の送葬

遠山の夕霞

冬田の晚稻

雨後の月魄

木末の夕濱

池の中嶋上

池の中嶋下

後帙四冊

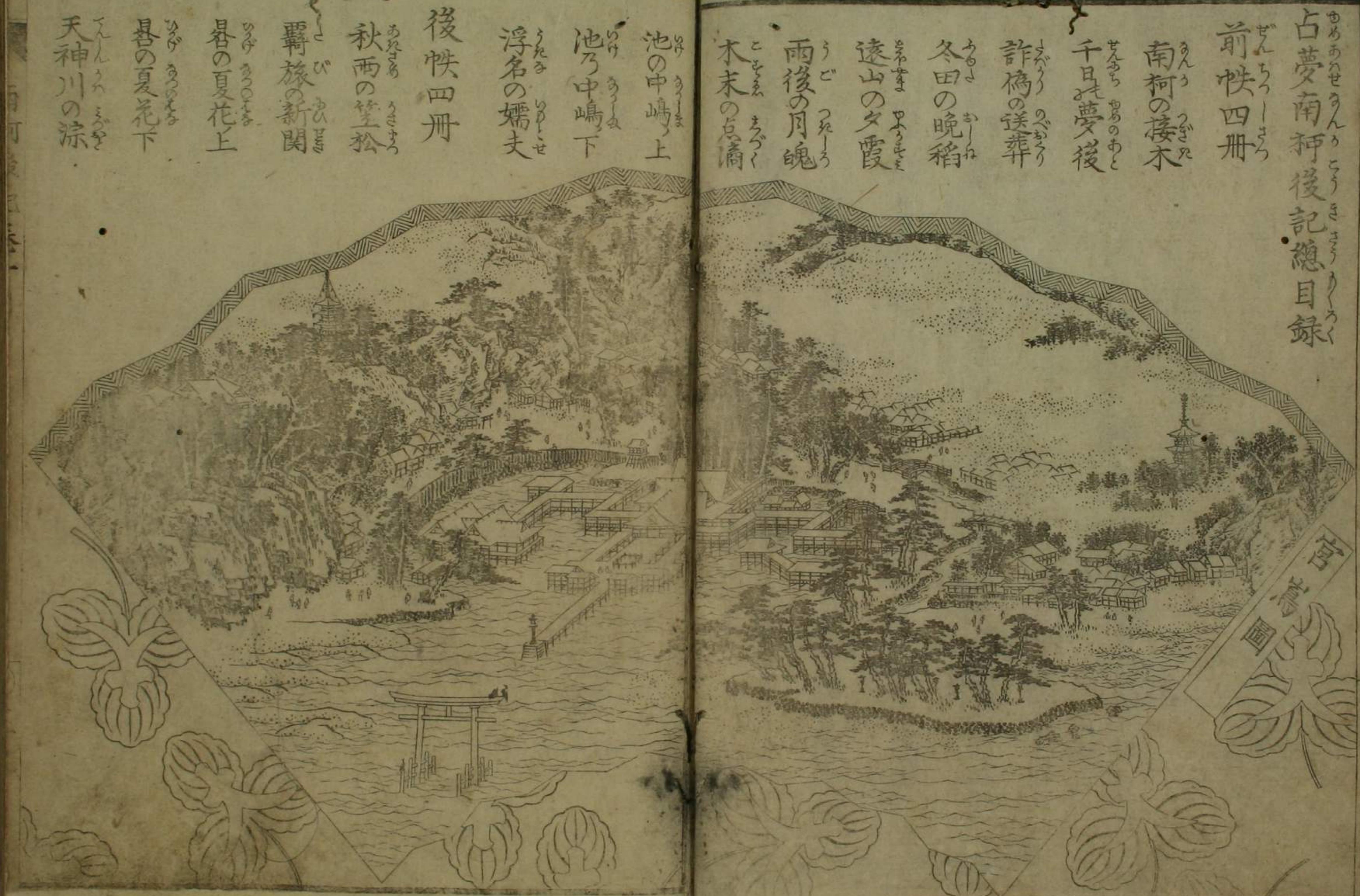
秋西の望松

羈旅の新聞

暮の夏花上

暮の夏花下

天神川の涼



過去の菴主

槐樹の手斧

夜川の野航

合歡の花捕

紫櫛の雨笠

統計八卷此

間又鞆秋雨

笠松為上下

題目二十一

今鞆鞆秋雨

下各四卷

全部目次果

一念精誠半楚雲青天
白日更誰論無端草木
故殘湿雲々驚歎

緑野村

まつ金集人

新姿攻撃安徳

角川文庫



全
文

刀
七

久旱逢甘
雨他鄉遇
故人洞房
花燭夜金榜

名時

宋人四喜句

刀
同樹

お
花

夕
立の

より

森
よ雲

ぞれぞ

松
の下

蘆
津

信
清
軒

あ
山

坐
松
平
仰

角
可
免
已
上



年紀

永正元年

続井順昭米谷山の老楠樹を伐り丹波都枉死する時年七十六歳をえ

八歳^シ永正二年

赤根羊六が妻輪篠病死を時小羊七ヶ年十一かさん^トが年九ヶ候

婚姻の礼を擬も是年の冬かさん改めて笠松平三^ト小養つれを後裔伎ありと名を三

勝と改む永正三年

園花七歳をの又典膳婚縁を羊六と浅毛永正十二年羊七セ二歳園花

十歳春婚姻の礼あり夏より至て続井吉雅近臣赤根半七今市全八布施蝶九郎等

を訪て済み洛小舟^ト白引^ト小吉稚廿一歳園花が兄曾太郎と同庚^トの秋笠松年三脚平

足平を殺して奈良^ト走方木七ニ勝白河山小再會^ト共^ト亡命をこの時ニ勝十九歳

永正十三年三勝二十歳近江の安賀の莊小女児^ト通を産ひ

永正十七年羊七廿六歳

旅店小信濃の番掛^ト病む時又三勝廿四歳才児^ト通五歳

永正十八年亨禄改前ノ年

亨禄元年今亥十二月上旬厚倉二郎大夫暗小金を羊七小女^トあきらめに月七日の夜羊六

敷浪ホ^ト子小代^ト浪花の千日墓小自殺一蠟松典膳致仕入道^ト時小羊七セ七歳

三勝廿五歳曾太郎廿六歳園花セ二才^ト通六歳

以上前篇

亨禄三年三勝廿七歳男五歲大和小產ひとの時父の羊七^ト進と改名^トてその子

を半七と名づ

亨禄四年園花廿五歳ちやくて男子を出産^トくこれを半作^ト名づく

天文元年三勝亦男子を産む陶立郎隆春られ

天文七年十一月七日典膳入道病

ト死小死^ト今茲の冬曾太郎亦その妻厚倉氏を喪ふうれ二郎太夫が女児^ト天文

八年蠟松曾太郎が女児初花八歳^ト玉枕御前の侍童小手りつゝ初花^ト妹夏山

暦^ト七歳叔母園花^ト養ひ

天文十四年続井順勝の息女槐姫十四歳上洛

トア入道黄門一恩軒の養女^トある半之進^ト長女^ト通ら^ト年廿三歳槐姫小從^ト洛

へ赴く天文十六年槐姫十六歳今茲大内家と婚縁整^ト周防山口^ト赴く厚倉

二郎大夫父子が通隆音仙壁炊粟本られ小從^ト天文十七年赤根隆春陶音賢

の養子とある陶立郎と稱は是年笠松平三外孫平作^ト養ひ家を嗣せ曾太郎が

夏山を卒化^ト妻とし十月六日小至^ト平三病死^ト同月十四日厚倉二郎大夫周防

の山只病死^トの子隼人友善当奔^ト往^トをそぞぞ天文十八年笠松平作^ト妻十七

歳今茲男子と出産^トくこれを平太郎と名づく天文十九年赤根蠟松の兩家志を同く

さくす六家浪水が廿二回の法筵を開んが小の年の冬親族ひくい浪花の法筵
 えはるとく
 トモ讀く時より年を進五十歳曾太郎四十歳三勝四十八歳園苑四十四歳も通せ八歳後
 の半七廿歳笠松平作二十歳陶五郎十九歳曾太郎が長女初花十九歳卒が妻
 夏山十八歳平作が一子平太郎二歳から後の後記の後端餘り詳か篇の中をえり

南柯後記列傳姓氏畧目

続井順勝	玉枕御前	槐姫	蟻松曾太郎
赤根半之進	刀冶羊七	笠松平作	陶五郎隆春
厚倉隼人友善	賣鐵者全兵	刀冶同樹	炊粟耶太郎
仙野呂東二	私率丹三	三勝	園花
阿通	阿花	夏山	晚稻
員外姓氏	持明院道忍軒	大内義隆	大内義基
陶權頭晴賢			

第三十七全傳 右夢南柯後記卷之一

畧目單

東都

曲亭馬琴編次

南柯の接木

従時亨禄元年。前編、永禄と云ふ書の事。
 三勝が母敷浪ホスカ。ちのく。子小差。あよ代。千日墓の霜と消へ。より。仰
 の間二十三年を経た。されば大和の続井家より順昭既去世を逝ひて嫡男
 吉稚丸。父祖の箕裘を承嗣す。伊賀より順勝。順正。順徳。と稱せ。順勝。小息文
 ありて槐姫と號す。正小是錦の上小花を折添金の中小玉を琢み。衣
 止あるのみあらで。才術。心操風流。華洛の由縁小就て持明院前中納
 言の入道。一忍軒。年才二八の春の比防長禮疏。四个國の守護
 従二位兵部卿。兼太宰大貳。大内義隆の嫡男。三位中將義基の北の臺少

をあらゆひて大内家の居城たる。周防圓山口の郷鶴の嶺うる木の御所へ興
ちゆひへよう。既に四年の春秋を経て。今茲へとや。十九才よりアリアム。ニレ
ハナソ。続井の執權厚倉二郎大夫友春の槐姫小傳きて。周防圓山口
近づく者衆人の教かのまにりんば。西圓山口も大和みても。これを惜ぬりのく
う。あまく厚倉がよか隼人友善とくぐりの父ともに大内あかはる従ふめよま
てるゆゑにて。忍比山口を遂電し。二年以來従方あれど。その年の父小畠平之
とて。彼を識るりの亦ち居ゆ。さて亦赤根羊七が女児お通の稚サルヒヤれて。槐
姫の陪童ふきすり仕る。自然と手とあひ。歎をよみあらひて。秀致をさく。
かうねが小式部の内侍の童たちあひむ。ゆくやありんとて。奇たりの小ぞ人々
おひる。かくとお通の槐姫小冊たる。誓義洛小ありて。持明院殿小學よび奉
そ。秋道の奥義を究つ。牙陶立郎りうとも。小姫君小俱くまゆら。周防
圓山口にて。大内家小扈從たる。先三勝へ更に男児二元を生え。園花が腹
ゆも男児一人を奉だり。子孫あらよギセハギ之進と改名し。二猪が腹うけ。長男を承
きと名告らす。小今姫ハモセ一歳小きり。次男は笠松平之が家を嗣せて。平作
と呼びたる。後のま七八年只一つのあくまで二十り。第三男は槐姫小冊たて。
西園(西園)へ赴けしが。どうやら。大内家第一の執權陶権頭晴賢が養子とあ
りて。陶五郎隆春と名告る。十九歳小きり。さればお通と後のまこと。
陶五郎が母ハ二猪小て。笠松平作が母ハ園花うり。彼おき異母兄才あれども。心
ざの怜悧と。あらび勝らど。これや。忠臣孝子の築ありとて。安久愛うら
すまれて。したば群のまうち続く。のうり。盈れば。膏る浮世か。園花が又。大内
典膳入道夢幻斎。いねる天文七年十一月七日。小頓よ病よ。往生の素懐と
よ。うきみうふ。遂笠松平二。が。また十七年の十月六日。小老病身。小通とあらび。苦惱を覺

えど睡るが如く身すみありけり。されば三猪の畠裏小典宿か養女とす。半之進
が正妻なり。又園花の平二を又とうべ。赤根が側室かるく小けれど。莫逆異父
の妹妹されば。送ふ嫁也。嫁とぞ。城皇女英の賢ふるも。やくせとへが呉のめん。
貞女のもすも引うべし。あハ平ニ世小在。外孫のか通を。養ひうて。
えがほ小女婿を擇。おを嗣せんと。福ふ才を慕ひ色小愛。媒約りく
婚縁を。ひふるりの少からぬど。か通ひ才学せよ。務む。見識男子ゆも
なう。福とば。他人と苦樂を共よせんゆをねぐら。給事して身を終らんとて。
まく西園一劫き。ふ平ニ忽地を失ひ。半之進。二男平作。園花が腹小
參れられ。が家を嗣ぢよ。便ゆりと。それをまく進ふ。主君小ゆ
えあづ免許を。女母の園花りそ。小彼平作を迎。とて。ふ家。の泰督
と定め。戻松曾太郎が次の女児夏山。い。花がな。姪ゆ。平作とて
従母。昆弟あり。年の紀も似。つうた夫婦。あうべ。と。襲。と曾太郎。小相謀
て。平作ハ十八歳。夏山が十六歳。と。年。の春。終。又。婚姻を整。し。い。ドめと
あ。と。妻堵の心ひをあら。が。是年の冬。平二ハ身。あ。と。ね。か。て。平作夏山。の。慈母園花
小孝心厚く。妹夫の契。も。序。か。り。で。男兒を。さ。と。舉。一。ぶ。ん。を。平太郎と
名づけ。つ。ひと。健。す。小。生。た。し。立。す。か。裕。よ。も。あ。り。ふ。け。と。バ。赤根戻松。ホ。ク。飲。び
い。ば。き。ら。く。茎。を。花。か。ろ。小。初。孫。されば。只。是。掌。中の。殊。掉。改。の。花。と。慈。愛。と。塵。立
そ。え。だ。娘。育。り。う。う。移。よ。戻。松。曾。太。郎。ハ。父。の。典。膳。入。道。が。せ。せ。逝。て。後。ハ。親。と
も。憑。く。ら。ひ。ち。厚。倉。二。郎。大。夫。ハ。周。防。の。山。口。起。た。る。彼。处。か。そ。ま。ま。そ。と。の。
子。車。人。友。善。ハ。逐。電。一。と。往。方。あれ。ど。と。す。え。う。ぶ。と。した。う。情。く。つ。い。一。己。の
才。學。を。り。て。せ。ぐ。同。僚。赤。根。羊。え。進。り。う。と。も。少。か。と。人。の。舊。規。を。溫。政。事
可。に。小。私。る。か。じ。う。が。直。た。り。の。の。舉。ら。れ。て。枉。ま。る。り。の。わ。そ。の。非。を。改。め。鄰。固。ま。く

附屬ひて。続井の家繁昌の室所の軍のあんがほえむ小異うれば順勝
の息女槐姫へ西四个國の大諸侯大内家と婚縁整ひ更に続井の武
威を傍そと皆是赤根蟻松兩執権の善政のあんとこううべ。あらわれど
花落葉を生む身のはじどは憂み。件の様曾太郎ひ二十年を全
きゆう季厚倉二郎大夫が女兒を娶る。子ども二人まで生せたるがまみ女
すあり。刺妻の世を早くして忘記ゆく見ゆの娘の女見と初花夏山と名
けられ。あらゆる長女初花の幼稚うる。後の羊七と結鬟ひきれども母の
あらぬゆ。女子を育む。彼が幼少したるゆあらじ人であるまでひとと
り。小秋の秋よ主君の内室玉枕御前の女童小ちめらセー。腰りうち
召使ひて。まちひ縫刺糸竹の技おももあくからうかべ。と艶女小生たちて
と争はれ。才小るもとけふぞ。今姫の暇をぬづく。半七小妻として
便のりの小ちめ。ひじりづぶすうきて。ゆくらひつうちゆせ。次の女兒
父の曾太郎の豫すよりその準備あるうがら玉枕御前の珠そら。不
夏山をば幼稚よ主園苑よ養へてこれをば笠松平作小妻せられ。嫁ゆき
す。あらゆ。初孫をまくとせびよ。ゆてぞ。嫁衣若ち郎の家嗣へば
男す。あらゆ。どちのトアレバ。後妻を娶ら。任のまこと平作ゆ。承
きゆく。あらゆ。忠孝の社役うれば。女督ゆ。不足。かぶ女兒ふう
長す。子共夥りまく。外孫のうちづれがまれ。養ひて家を嗣する。
まよ。連まにあらじとて。親族ふく。ゆかぬれ。後妻を薦め。どううけいど。
今あは平小足らぬ身の年未。鰐夫ふく。ぞうりふく。この篤き。前編
南柯夢第六卷のをう。享禄元年十二月七日の夜赤根半六敷浪ふく。千日
墓ゆ。枉死。次後元二十三年のみじゆを。あら記す。あり。り

南柯夢をえふる人或ひえて忘たるやむらばやう前編を熟貰。更にこの條を
さよくえざれば耳を塞て物をうらぐ。謡どいづも言ひて笑ひあがめゆまわくへど。

やまと
かめのゆと
千日の大夢後

千日夢後
時より天文十九年庚戌秋九月の下浣からつ。今茲十二月うちの七日の赤根半六と安浪が二十二回忌をむかへたる。蟻松典膳夢幼齋が十二回忌。笠森平三と厚倉友春が二回忌ふさく相當せり。この諸冥位へ赤根蟻松両家のみ。親あり。舅あり。恩人あり。就中半之進と二勝の背勅心小死後と親と親と親。後小余を隕へて代をあらん後の辰までも大和小名うち妹と夫のゆれらぬ弊を結びとえて家の榮をも内へせず。とめとも送ゆひ。言の聲が高た
父母の恩。すやうやの山を亦十づ積へ思ふ。これふにまぐらに住し。せめ
殿の近習たる君邊ふ事る身の。すや小妻時の猿もめし時を嫌う。ゆきの暇をまじあらん。便あらん。せり。余十月のちの六日へ笠松阿翁の二面
忌あらば一切の追薦供養をことねよどり。而行んことをよめれと曾太郎がつゝよけ。がて主君伊賀ぬ。事の趣をゆえあげて。あのく行裝をあせり。時小十月二日をり。首途の日と定め。うぶ園苑をのぞ笠松平作と。物の裏山孫の平太郎木をはい蟻松曾太郎。玉枕御前小給事す。長女初花をまぢぐの暇をもまじ。これを携。朔日。薄暮より。是彼斎。半之進が宅へ娶ひ来て。翌りろち小啓行せんと。甲夜よまよめ。主夫婦

半七歩へ曾太郎園花が齋たる。偏提又酒を酌みて。あぐも席をすまぬ。
小奴隸ハ駄荷を造るとき。と置き。い言ひ。上をかへどくへ折せら。かりひも
クレど周防へとお通と陶五郎の来まをと。私事が報知されば。要皆云ふ
いふ。とうち翠とよでに飲びつ。かづくはび入きて対面を。四年の再会が
うあれば。親子同胞恙あれを。送又祝へ祝されど。さてお進三勝車を。通
と陶五郎小附へ。今年ハ京廟の年回されば法筵を法善寺小安みよ。翌ハ浪花
へ赴くはを競走じ。波達ハ又うあるを。猛小故御帰来つ。櫻姫より
恙あくや在ゆんひとなりと。眉根をうちとぞう向む。お通ひ荒す小うち
ええ。さかう。兵内裡あれど。吾脩同胞が。ましに。こと。つや
義治と大和の。むん使をうりあつて。のぼりたるすで。かぢり。その故へ年未合戦
お此時。されば諸國の。土民疲たり。されば應仁の擾乱より。義治も舊の義
洛へ。かねど。とひき。荒果て。鄙の住居ふけり。とろん。それよ。遙立する。周防
山口の熱鬧。街衢を九條か。ひらめく。平安京。す。據たま。されば西山東山仰
ひ。高倉や。城小路と。京訓の里の由縁の。花の兄梅の宮。す。嵯峨太秦。平
本通り。北野の松現。よ。十丈の花の御所。比枝。も。及び。鶴の嶺。金閣
銀閣。建つらね。長生殿。春秋の富小路。も。遠か。不老門。よ。日月連丸。鷄鉢
町。鳥泡。極り。黄金を堀竹の木の紋。う。六角通り。その水鳥の鴨。河。朱
す。や。柳の馬場。二丈三條。大橋の。ある。繁花を。何。の。祝。く。や。口吟
けん。大内。と。め。ぞ。と。文。す。今。あれ。と。裏の字。略。セ。大内。裏。と。例の人の。辯
あ。べ。され。が。諸國の。商賈。ホ。聚。合。う。ふ。も。聚。ひ。ま。と。建。づ。け。る。廓。へ。三里。か
程。と。棚。を。張。る。衣の。樹。小。奥の。樹。奇。呂。唐。物。奉。棋。書。画。交。易。賣。買。あ。ふ。

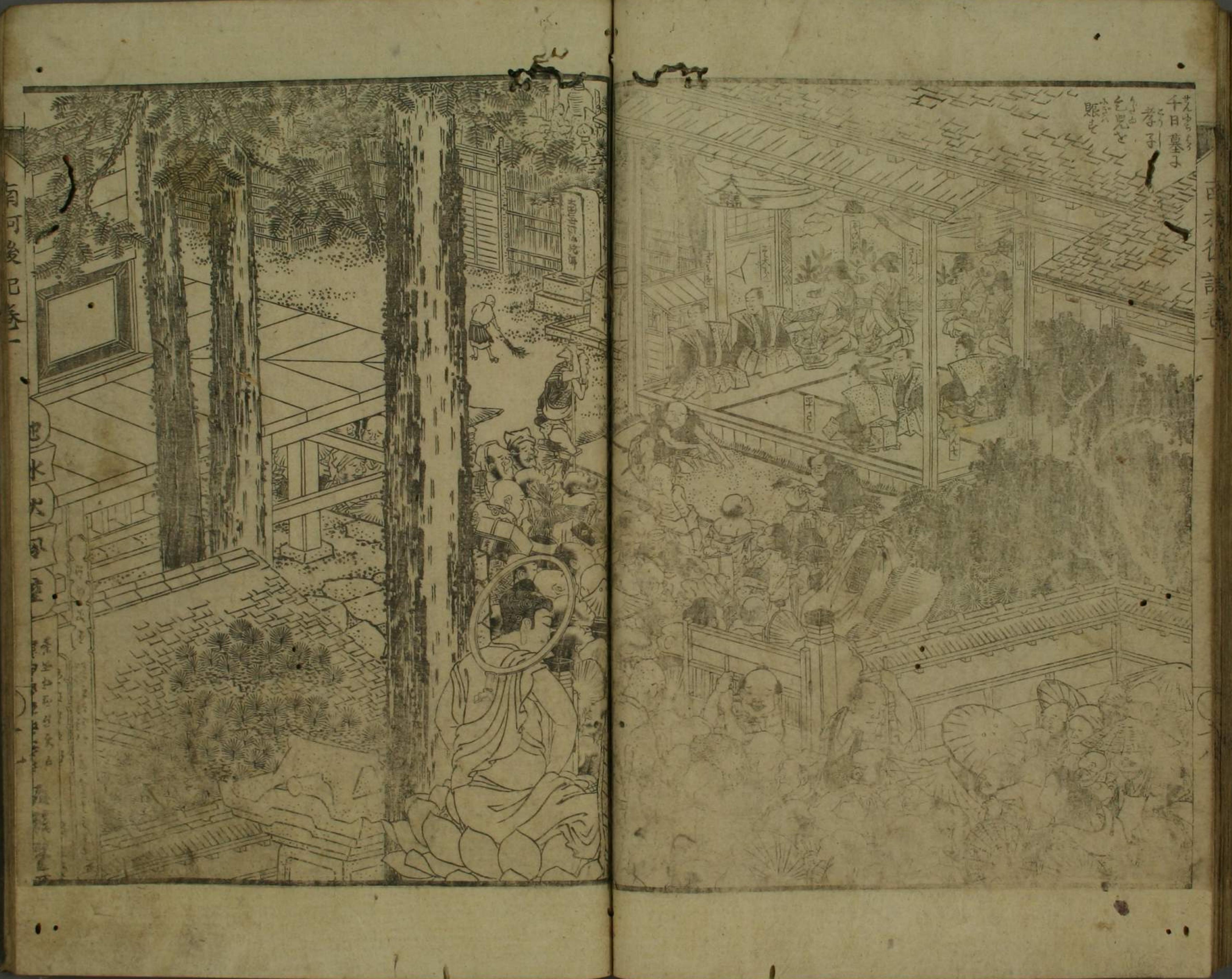
卷之三

涙かひとへやひたひ。胸すゝまを推量る。三務の園苑と。どひぞ面をあらへば。
かうれの涙。曾太郎も鼻うちう。言後させ。陶五郎を。つぐと。とくと。小
膝をすめ。四年アソウ。ふ隆春。よだ男小うりあひたま。ちん身幼少。眼
きのえあらざる。末遇。くとえ。と。養うて。と。がふすも。うそばせと。あひながら。
いまが。延やじと。由断。と。陶氏小先せらま。曾太郎が不幸ゆく。却ちん身が
あひ。ええの。きみ。と。幸。と。彼權頭晴賢。めい。大内第一の執柄。と。周防富田の城主。ふ。と。所
帶をは。と。九牛が一毛。す。と。足らじ。貪禍の天の。あ。不化家を続。と。いひ
あが。季。す。と。く。涙同抱。す。と。立猪ア。と。びうされ。た。と。称噴。す。と。が。陶五郎。
扇を膝。と。さ。と。の。と。小父の言禁。と。え。の。と。美を結び。と。父。と。ある
の。戸族と。徳行。と。擇め。ひ。と。緑の。妻。と。論。と。死。君。金。黙止。め。じ。と。
陶氏。か。難。と。是。全。と。隆春。が。運。の。究。め。と。テ。そ。と。ひ。と。言。可。惜。と。申。縁。よ。の
ひ。よ。も。大内。景。良。の。鼻。祖。の。百。濟。圓。王。東。明。八。代。の。後。胤。餘。漳。王。第。二。の。王
ト。ル。ザ。ス。子。琳。璋。と。の。人。唐。の。乱。を。避。て。周。防。圓。佐。彼。郡。鞠。生。の。浦。の。景。良。賓。ア
キ。と。お。ま。未。と。留。る。実。ふ。と。が。大。日。本。推。古。天。皇。の。十九。年。の。ゆ。う。と。そ。ま。え。た。と。亦。新。撰。姓
ト。欽。明。天。皇。の。ゆ。暗。天。朝。の。投。化。と。金。の。景。良。公。と。利。と。金。の。年。居。を。獻。る。天
皇。特。小。譽。と。を。ゆ。ひ。と。景。良。公。の。姓。を。ゆ。ふ。と。え。に。と。も。あ。れ。が。是。情。の。所
を。ゆ。か。兩。親。う。と。ひ。づ。れ。う。是。あ。る。を。あ。い。と。式。い。と。琳。聖。王。子。七。代。の。後。長。門。守。正。恒
を。ゆ。か。時。朝。廷。を。下。め。て。被。先。祖。の。ま。と。と。ま。地。の。名。小。う。と。と。景。良。朝。臣。の。姓
を。ゆ。か。是。う。と。家。号。を。大。内。と。称。と。た。と。ゆ。と。正。恒。十。代。の。後。胤。左。京。權。大。夫。義
弘。朝。臣。周。防。圓。山。口。小。居。城。と。と。長。門。石。見。豐。前。水。の。圓。を。討。ち。と。明
徳。の。乱。か。軍。功。あ。と。故。小。足。利。殿。強。勧。賞。と。と。和。泉。紀。伊。の。二。个。圓。を。か

増す。義弘又賜ひゝが。泉州塙小居城せり。ちやれど。義弘只管武功と誇る。足利殿を蔑む。終よ鋒を争ふに及ばず。散く小戦ひ負應永六年十二月廿二日。和泉路より討死しゆひぬ。やまと足利殿の先功を捨ゆぬ。孫所領の地をうけ。義興の時より。又武功すがゆ。後三位小叙りあり。就中當主義隆卿へ武略父祖ゆもります。西數ヶ圓を伐ちて。剝内裏。造宮の料物を献ます。三位の侍従兼太宰大貳小補ちらき。頗る進び。後三位の兵部卿。小あくまか。亦う。養父陶権頭晴賢の主君大内殿と同祖たり。往古百濟の琳聖王子投化し。景良賓小著取のとれ。相從ひ未だ。二人の臣下ある。これ陶山口の先祖あり。主家へく小セハ代。が家も又七餘代氏といひ。禄といひ。肩を擧ぐりのゆかられど。驕るより久く。も明白する。がれ。隆春が歎たゞか。傳ゆく。晴賢

の養父とし陶隆房入道。道喜。脣小ほひの実子。やし。陶立郎。隆豊とひあり。又の道喜。富田若山の城下。隠居し。五郎。隆豊。山口小あ。三。一。隆豊。富田。小い。父の安否を伺ひ。序。主君義隆の賞罰。非法。るよと演す。や。あからひ。又の道喜つゝとゆて。や。のり。年二十。ゆも足も。主君を蔑む。のころゆ。これ死すべ必謀。叛さざれのことを。密小家隸からぬ。情あく。も。隆豊を刺殺。ナリ。と。すん。このを傳す。く。の。或の掌を抱て。擎る。嘆。縦見透思。や。とも。す。を。殺を。ゆ。が。と。小。況。子。も。悪。と。も。定。く。あ。の。一。よ。を。主君。の。お。小。殺。一。の。道。喜。稀。あ。忠。臣。と。そ。只。顧。小。譽。る。も。あ。或。へ。眉。を。う。ら。頗。め。又。子。の。道。天。性。う。り。あ。の。か。一。言。の。下。小。是。非。を。決。く。ア。忽。ば。あ。の。子。を。殺。と。道。喜。が。か。タ。荒。狼。よ。を。懲。し。彼。そ。の。子。を。ぶ。も。愛。せ。ぐ。と。う。

主君を愛し。之名を好む。忠臣あることを。而彈きのものとす。
而して陶道喜。亦一子をめりあひ。朋輩の子を養て。亦既徳す。而
るが。身へり徳もあらず。身すりとく。の養として。陶氏の家督とあらう
る。か。養父。晴賢。其を。亦陶五郎と呼し。ゆ。快らん。つり。陶の一
族の驕き。形勢を。ゆ。黨を樹す。私の恩を絶し。比周を。民の心を失ふ。
されば大内の諸老臣。杉隼人。花石田。監鷲津。松原宮。二吉。ホ。至るまで。媚
を求ひ。家々ひ。權威を。大内殿。小。大。ともり。芳るべ。されど。豊國會
友春世。を逝て。安危を論す。の。主君と。よし。養父といひ。富貴職祿
その身。か。されど。天命を。かそれあひ。社ありの。必老。ノ。隆春。とりて
られを。が。危急を累卵の。某。ら。あ。う。ら。の。ふ。と。や。ふ。彼養子と。ある
ゆを願ひ。あ。れ。ど。穀の近習。扈後の中。擇せ。ひ。主君の。し。媒約す
き。腕を。小道。親族の遠離。人よ。からせぬ。身の憂苦。外飾。が。まの
幸ふ。不幸。最甚。されが。と。陶氏と。既。親子の義を。結。ば。榮。とも。枯。る。
安危を。父と。共。よせん。と。う。づ。外。今更。よ。化。ひ。が。ど。と。うち。ひ。あ。た。る。述懐。小
曾太郎。あ。く。感嘆。微妙。も。の。り。の。う。され。身の。う。き。を。幸。う。と
か。づ。か。す。だ。る。も。あ。れ。が。言。を。設。て。試。う。ひ。志。を。継。う。と。そ。く。難。又
を諷諫。妙の。お通。と。ひ。を。あ。く。君。小忠義。を。竭。一。ゆ。え。か。ど。赤根
ね。と。会。釋。す。ど。も。羊。進。へ。只。うち。す。と。魚。改。の。よ。く。あ。み。の。き。ひ。出。て。母。よ
り。物。ど。そ。ど。ひ。ま。わ。く。ま。せ。え。も。ひ。の。傍。痛。を。か。通。う。す。と。ひ。安。ゆ。二。持
園。花。く。が。ま。う。初。花。も。夏。山。も。と。ひ。と。せ。ど。ほ。と。ひ。ぶ。と。も。う。ま。い。う。半。七
と。平。作。ひ。父。の。手。を。汲。り。ね。そ。ひ。慰。ん。せ。も。る。そ。の。席。も。す。ら。び。く。ま。程。小



宗族母黨圍坐して庭の落葉と土を積る四年未だのあやう小冬の夜
あれど長くもかがえど鷦鳴曉を告ふればか通陶五郎の浴にて衣脱を
整伊賀父王枕御前のそりよし。皆井の館小舟候へ入道黃門一忍軒の
迎う。上洛あるとすをすま。三位中ねと槐姫の消息を進らされば伊
賀及夫婦。彼消息をひらあつ。西園の姫君のうへを向せめひと酒飯を
あつま。兼洛の序よゑをあべひとぞせられさん。あらゆるよこよそへ曾ぬう。
逗苗ひどうにせたゞべと。猿子返書を賜じう。法善寺詣のをえ
ちじく退出つ。の時日へと。西小傾たよりれど羊之進曾太郎へ彼木を
ねはげて足弱きが禱よ無し。一族主従五十餘人直さに大和を起行てこの日へ
四里が行よ宿を求む。次の日浪花へ赴ん。旅館を定め衆皆法善寺
詔へくが寺僧出迎す。客殿へ誘引。法會の。豫の消息ふよつてぞ
ひぬ絶妙の假屋へ金毘羅堂の右みのゆと小修院をり。あづ長途の
般房を勦ひと信ひら。叮寧小數祐り。當下羊之進懐より。押
一枚あまうつだあつた。席よ法号俗名年月を書記せと。押
印ひら。寺僧又指示し。これにん諸天位。俗名赤根半六。蟻松典膳が妻
敦浪と寫し。某が実父と姑。今茲十二月の七日へ二十三回忌小相當
也。又夢幻居士と写せ。これある曾太郎。苑木が父典膳これ。これ今
茲の十月七日を。十三回忌の稱月と。又俗名笠松平三と写せ。三勝喜
苑木が義父ある。この月六日へ三回忌の稱月と。又俗名厚倉二郎。太夫友春
と写せ。又恩人蟻松氏の。又男。舅。うぶ。られも。月。吉日。二回
忌の称月ある。又俗名丹波都と写せ。二勝が実父俗名篠篠と写せ
。某が實父。と。中年六と敦浪の墓へ當寺小ゆ。これを法會の正

位とえ。身食卓々の大和みよへ役し。厚倉の周防の山口みて病死せり。但
舟波都へ没しそよ四十一年。輪篠へ四十年よりゆども。五十回忌をうの
法會小うりうる共よ回向へありべ。と縛詳よ演説。施物の目録小うり
添す。そ出で。曾太郎へ私卒兩三人。布施物をうる運びて處せんす。
安排せば寺僧木あらゆ受とく。方丈よ運び納る。住持の上人立出
る。追薦の志の篤を唱賀し。長途の疲労を慰め。後
の歎待へ。書もつさば。この日の十月三日あり。こそ法會の翌日
よ。三個同と定め。清僧三十員を延請す。經卷の綴を解む。やく
赤根蟻松の一簇。旅館小立つ。この夜より精進素齋にて。衣殿を
整正。毎日小法善寺の法筵小列坐す。読經を聽せん。既に結願の
内小うりければ。幕師法坐小著す。佛法の不可思議を観。施主檀
越の功德を演ゆ。婆僧これを和賀す。樂童管絃を奏す。又の
形体善盡す。天衆も小影向し。幽冥得脱疑ひうとぞ見え。やく法
会果ユリバ。施主の男女打つれうち。施行の假屋入り。支卒奴隸前後
小警固い。推高く積累た。四十六俵の白米。十三回とせ三回の敷小豆。卒貢文
の青鈔。三周七回五十年の忌日の数を表す。彼等す。聚合未て今か
今かと相ひたるを見ゆ。蠅の如く小群とも。或へ嬰兒を乳。又著老翁を扶
見ゆ。又。呼ふ鳥。只嘴と餌。又求食。覆車の前の村莊貰。啼
引聲うよ。家々よ。呼ふ鳥。只嘴と餌。又求食。覆車の前の村莊貰。啼
す。又。呼ふ鳥。燕口の敗袋。をあく。そられ。一件小。弥陀の光も錢龜の手足隙
ある。福徳の三歳鯉。袖。とひ。小大もあらず。如是畜生。諸鳥跋虫江河の
奥壁。悉皆成佛。平等利益と異口同音。又。渴へば。水を乞ふ。又。渴へば。水を
つぐ。と。又。ひづ。か。信濃。す。沓懸の旅の宿。小病卧せ。夫ひづと

弾く三絃の音。そのひと苦いも人の門邊よたか劍を身先の月の下に來る。
こまも乞食を乞ひと昔忘れぬ身の幸ひあがめある袖の雨笠屋裏
屋とゆれつ。貧しくもあじ浪花深竹久人のうきらんとりひどもそれと云ひ
す。赤根や共よ嗟嘆せり。さる程よ施行も既よ果へば衆皆假屋を立べつ。
冬枯れら草の原。あれ名古山の墓あり。そぞどや今より夢ふす。似ぞ夢
うみ夢の迹。二十三年十月のうちあづきそつやまと。半も進へ傷ゆ。石塔碑小
指一ノ三筋。うれをえあつてや。亨祿元年十二月七日。嵐雪月照信士。月
雪妙霜信女。一蓮託生俗名和列五條新町赤根半七。美濃屋三勝。と形
著し。これとちん身とその夜。この處すゝ死ぬを厚倉ゆ。諒光
らん。像見がつゝの蓑髪蔓と假髪を瘞。標石よ送て夫婦が名の憂。とか
き口説く夫よ。秋のあづれをくみあた。二筋の園花と。ごく晝れ明燈をさん
かうえつ歎息し。ひむらうねどその夜。親と親とがよそよそひの間よ葉
せ。あとう紙の遠書。うち小貼す。あひ。悔アうらぬ水芭の迹。吊今日
のま向草枯ゆ。うれの面影。今スルうち小竹。じえをが異よぢる同胞。が
親の非業の死ひ異よぢ。ひづれも過せぬ。引の山路よ寄く。斧の柄。小贋れて
楠の香と消。或え狼疮津の蘆のあ枯る。霜の夜の月の劍。よつてぬ
あれ。終をとうあひ。親をうへがうれ時の憂。あひ。この數うぐれ物足らぬ
とも思ひ。今へ貪る。昔が恋へとく。あらねりをうへ。も候へども誠る。
お通も臉押拭ひ定ふかほえ。わらねど。まうかまうの夜外翁。うか。負れて
わやうりん。どうぞあり。彼首是首をえへ。がをそりくふとも。冬の
の鶯隱口の花。花とりうともにつくと立夏山。も憂ゆがれぬ紫末の点

羊七卒作陶五郎も身のほどふうじとゆく。生れ前まへの哀別離苦を今さら
ちゆぢひす。えよ夢の徃すうみ。さあぐも送天祝の名。標石とりうせふる
まじゆせふかたつもの。余長うれと祈るのを。いづみ歎くあひそと諫とが曾太
郎。うち度々て声を激し。かづきとまわやまん赤根生ゆゑと似けぬ。これも親
を、慕たます。さしくもうち歎くを。あら人のねとせんや。さくに向むかしとま向の香
草を折る。あらがこの一言ふ諫られ。ひく歌を改めて。佛の員と七本の筆都婆ふ
沃わぐ阿闍達羅。無皆ひく額めん。法号俗名唱つ。往生得脱正覺位。拔樂与
樂と念佛果す。墓所を立出了。兎小寺僧小別を告。後者ふを喰聚へ
歩よ。木べ轎子を。後方ふ檜ひ。うらつらも。せう旅宿へ帰りとを。

讒後の葬送

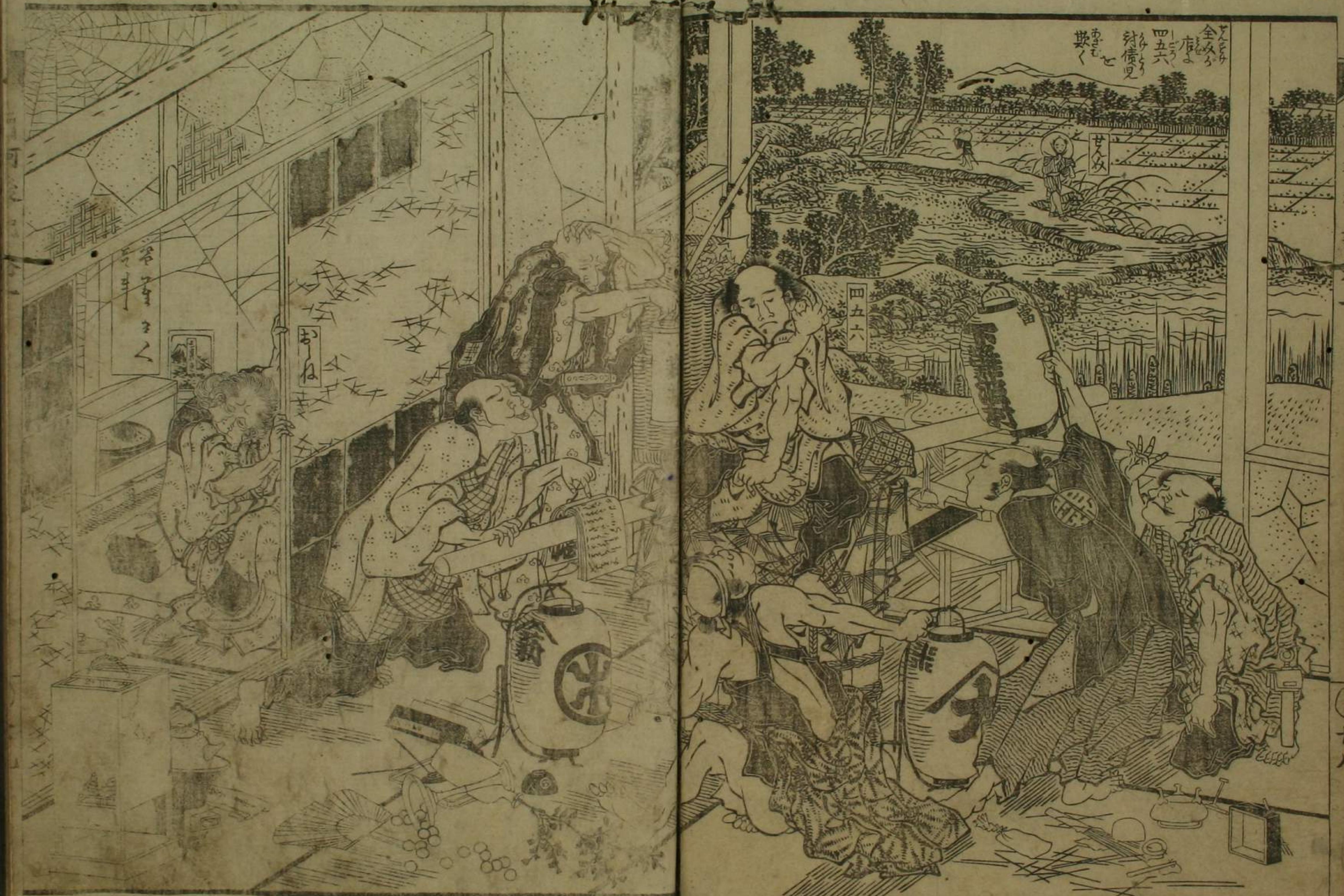
赤根城松の黨の法會備る。志を遂かず。次の日衆皆大歎へと
立候。又通陶五郎あり。既に續井殿の返書あり。寝地を退坐す。
私の旅あらねば。直ちに華経へ赴たまく。一忍軒のあん首途をすらまゐ
べと。名残の竭ぬ袂をうち。後者を引領へば。伏見街道を渡て
りそがれ。かのやに詰り。かく又やの難波村の稍盡處小敗鐵古衣紙
肩あらごと。かく穢汚たる物をのぞ買へり。賣りて生活とす。全般とよ
瘦商人あり。藁収草。りん集てもあらざ足らぬ。親子あらうが旦夕の煙
の價ひ。あらひも。あらへ母の病苦を。よのよひうちふ看病つ。孝行庸常ら
海の音あづまうけり。又融々とまく。ゆふり。夕陽の結句白屋。精衣一ツ
の暖き。小春日和と鶯の細く鳴く門の寂寥。浩然よられ。又がり。世
のうる若きの一荷。かゆまる吉道具を。肩も撓げふ擔ひ来て。遙か程西を
え入き。全般宿在。物夥買ひ。小直がく。よせんと。門口へ重擔を

撲地と杠うち。声はしあれが病卧せり。あとの母の頭を撲碗。小虎もよ葉鍋
あぐらだる枕邊。人ふえせんも憚の咳逆嘔くと咳ひて裏より羊面推
向く。二枚屏風とりうち。骨のそ高く病體ひ床掻痛ひふ腰を。それを
捨り起直り。四五六の内來まぢ。秋全外へ宿すあらねど。尻うちありと
懇ひき。本を帰る。と喫び入られて搔掻る。擔籠内の煙包さらば一吹
づきあと上を極み膝うみを。よ阿婆ひり来てえても来てえても。藥の
お味もあつりゆき。その佐ヌ頭嚙もむづ。此の飯の食りやす。欲うるく
ともなげき。近曾洛やのゑせ連秋うり。人の身よあとひぼめとけ。食きて
肥がぬりゆき。我らかを鬼すく。食著ゆくと信安か慰めあがら
えを。のを。腕を伸ば地炕の埋太ふ。和泉新内つたや。煙草も物をありせなき。
さうなばよ。併りぞれに留守の宿よ人の言葉の誠あくを。意とと思ふ。
世間のあらわの老のつるべ束一髪とりう去よ向く剥たる齒をあらわす。
お父も莞尔と笑。商賈夥計へそくみわらねど。全外とひをあり。あらわ
四五六の身のあらんべも。物貸すあつらるよ。げのまがやくも。のん。憩母が絆と
搗まごと。茶刷も所帶もあらねど。かた耳をべやせど。とて。憂心もせぬ
奇特の。がふを誓するかわらねど。どうふ稀見る孝行よ。愛てく。小坂大勢
商人もちゆく。物貸すあつらるよ。げのまがやくも。のん。憩母が絆と
あり。活業ふき。ものばく。物の入り。外と借錢。五月毎よ増不す。立七年
以前ト。婦ひ。せよと薦し。妻を娶。とくも。うら母の養ひ疎了
あり。殊さら。の貯蓄。うれ。寒衣を擇う。とく。贍縁結ぶ。りの。う。母
母だ。在せば。いわゆ。物足ら。とく。とく。ねと。それあり。けよ。う。う。う。
こうする。終。お。病の大病。買賣止。年年。ま。親子。坐食の胸苦

さを擣しゆ。といひやう。堪ねばうと嘆入り。四五六も嘆息し。それより又あらへ
嘆泣する。一口咽喉を潤しゆ。湯薬やある。と草鞋の紺とん捨てりふつち。
土瓶のぬり湯汲く。片手もよ捨る。鶴骨。衰ええと痛い。さみとふ勤め。
やようち捨てあく。やからうたぬ。といひつも枕を杖と身を起せば。呻そ
の儘小平臥ゆ。と物うち被るをあやしく。うち臥とのそゆ。身へあづの程も
あらぬ。よろよ似ばれん。親切を。今よりあれ全般がぬらばり。穿く。ゆくは
らんか。あどてあよをほなせと。ゆよぬがとよあよみえひ歩る。よぶもの。よどをと
おが今さらと。うち捨ても帰らきだ。これも浮世と四五六を。枕辺ふひ穴居す。
いみ阿婆す。浪速三段駆巡いても。頃日の日の短さ。果敢てに残書
あらざる。ゆえ素ひあつて。帰る。夏候と冬ひの外。一晩よりまつて敗器を買へ
まく肩の減せめど。傭夫買ふ場所。あへど。かうせ。肩をとえ。詞
敵ひきらすとも緩す。いからふべ。喃阿婆ひ。人の荒のえよのと。賤れても
折うへ。撰ふも又の高賣。喃阿婆ひ。入の荒のえよのと。賤れても
容易に。福を援ぬ。大黒町五条松本せり。ごじれ西。傾く日吉橋の小家の
窓からぬとめられ財布をひきつけ。直の相談出来て六七百へ。たゞ利のあ
る本。白木の位牌めや誰かの身の後もよをやふ。夜の鶴う。蠟燭與よ。龜
あずれて三曲のあうの煙よ。煤びた。乾津の花菖蒲。磬脚の脱。経札茶釜の尻
も黒髪よ。ほくよ。よもや。義美の鍋。獄の釜の二舛。む。これらひきようち思ひ
内へ入子の米櫃。輪のやうび。伊丹。宿。残る。廻米の菩薩の行を勤

に議論せど。さうきもひどく険を掉人の所帯を。ひそよくあらねどかく身の餘
の貯福ありと故あらず。正うなまをちのじて全般よ崇められせ矣。モ
を吹疵を求る。何へ入よ駢すばたからぬ所みづくけり。ヒトノセモアハ打
笑ひ文明よりの人へ只りの頃少ひゆき。今世よりあひぐに。軽ん身の居て躰
をき。後からこそひがんでがゆる吾脩が引うべ所。全般わくれとてあつせんや。
ヒドトイテ黄脣たゞ。よび行燈を。引かう。棚の隅あつ。燈籠ひとく
あく打つほ。薪燭の硫黃小壊くと。壊る鼻をうち掩ひ燭の底せども。ヒト
暗い瘦燈公を搔かう。そそ是から。飾附細ニ有。流落成が緊要阿嬢
ヒヨウく。おひひ。必音ふと。おひそ。マメ。ヒト後方。腰を抱え
起一。障子の内。潛る。折しもあれ。もやくと草金剛の鉄の音。門口ちく。ま
みれバ渠もや。まえたり。と四五六を。さう慌て門を鎖し。却付か。と彼此を
くまえ。飯米桶の内。鍋金と重し。され究竟と遠く。蓋ふ載どく
卓画と共にかけた。塵索の端ひと長尺十文字。牀足と結び。引捨る。程も
やらざるの戸を開ゆ。と三四人破呑む。敵ども。をひと應て頃々入れて
件の桶を正面。小押房の経机の片脚り。セラ。煙盤。上より位牌。銅磬。香
炉花盆。角接排。並べ。よく焦燥討債ども。幕。や暮ねよ。門鎖とも。今夜は
いぞ。曉を。ぐん。開ひ。乍り。あけよ。と誓言。ども。四五六騎。立。氣乞も。あぐりえ
ぢ。と臂月らう。二枚屏風を逆さ。小桶のほくろへ立。さらひ。う。笑つ。うち
ま。と。うち。喰を。戸口をまくら。と引かれ。約束。連と。木家の杵。一番栄と名吉。ア
挑燈揮て。まく。入。一番。薪屋の樵夫右助。二番。薪井。蔵物。体
ほり。と。約。莊役の親平。襄積も。消だる。番榜の座。埃。鞭つ殿。が。小
かのく。苦虫。喰。債。踏。が。隔。敗床の野郎席。萼の中。交る坊

主も臂を張て左布^{さむ}へ頭を廻ら。金^{かな}とひのつと祐^{ゆき}もどぶなよ全ぬい出^でむ迎
ふ。か懷^{いだ}く入^るまに影を隠^{かざ}せととあくまんべたや人の物を手^てて果^たる留
守^{すま}をつぶの大膳^{おほぜん}へ是^ままで物^{もの}ひつども面^{おもて}が認^{うな}るハ丁寺町の敗缺^{ひだれ}。
和^わ主^{ぬし}苗^{なえ}すを預^{あず}るやらこの件のもの合点^{あつて}。七月九月と両節まへ豆板
一顆^{いつ}茶^ぢ代^しらざる毎日三貼^{さん}の方剰^{のり}い缺^{くず}はん別^{べつ}裏^{うら}煉^{れん}藥^{やく}人^{じん}參^{さん}りて悉^ご進^{すす}送^{はら}。
とも。姓^{うり}の西^{にし}水加減^{みずかげん}煎^{せん}ト^ト常^{じょう}の如^く五貼^ご七貼^{しち}の風^{ふう}葉^{よう}でも二分礼^{ふんれい}はせ^せある。
況^きて歴^{れき}くの医者達^{だつ}が匙^{スプーン}を投^{なげ}ら大病人^{おび}を^{うけ}てとりも苗^{なえ}めの誰^{だれ}か蔭^{かげ}と
呑^のひゆふせ^ゆよするふをやくまを小療治^{こうりょうぢ}のあらば白銀^{しろぎん}巻^{まき}物^{もの}乾^か鯛^{たい}告^ご二疊^{にだつ}の
玄^{げん}闕^{くわん}に置^{おき}ゆる。尉斗目^{いとめ}麻^ま下^{した}の使者^{ししゃ}を受^{うけ}んよ腰^{こし}の床^ゆ榻^たの腰^{こし}だとも潰^{つぶ}まく
ひも^{ひも}換^か授^{じゆ}せん。長袖^{ながそ}の羽^はあれが書^かりも配^{はづ}か。討債^{とうさい}もいふれどことひ
費^うる秋^{あき}もあくへ茶^ぢの效^ひで生^う延^{のび}る。余^が今更惜^うしき。浩^{ひろ}びみ^みア^アそ不^ふ
得^えむあれをくもあらぬ命^{めい}あらば。ア^アシテハ吾^{われ}僧^{そう}が本事^{じご}人^{じん}參^{さん}を奉^{まつ}り^{まつ}る。
首^{くび}縊^{くび}るふ^ふのねと腰^{こし}のう隨^{まつ}人^{ひと}躰^{からだ}を膝^{ひざ}かう崩^{くず}せ片^{かた}胡^ご坐^{すく}四^よ六^{ろく}を笑^{わら}ひを
忍^{しの}び飽^あまぐりせそ^そ改^かを搔^かれ宣^{あらわ}す所^{ところ}有^あ理^り推^{すく}量^{りょう}の^のぞ^と全^{ぜん}体^{たい}の宿^{すく}よあら^うど
まく老^お母^めへとづくせも果^{くだ}と杵^{きん}及^{およ}翁^{おきな}右^う馬^ば左^さ馬^ば左右^{うしゆ}。帳^{じやう}面^{めん}披^ひく眼^{まなこ}を瞬^{しばら}まく^{まく}留^る
守^{まも}小居^{こゐ}敗^ひ鐵^{てつ}ど^と古^い物^{もの}買^うふが活業^{はつぎょう}ぐも。擇^{えら}も好^うく全^{ぜん}々^く古^い債^{のれ}殘^{のこ}り買^うれ^むば。
ま^まと^と喧^{けん}喰^くを買^うんと^とひん身^みうりと^と免^{めん}一^いが^いじ^しれ^めゆ^ゆ。うの春^{はる}う
ちか^つ進^{すす}む^むた^たる。飯^{めし}米^{こめ}の薪^{いのし}ど^と方^{ほう}剤^きよも^{よも}親^{おやぢ}と^とま^ま西^{せい}路^ろ余^よを^を繁^{しづ}ぐ膳^{ぜん}の綱^{つな}と^とそ^そう
あうそら朝夕^{あさりゆき}の烟^{えん}を立^たすた^たる薪^{いのし}の恩^{おん}徳^{とく}一百何十何丈^{ななじやう}へ済^すりうそ^その慈悲^{じひ}
仇^{むか}晦^{くわい}日^ひあうそ^そと^とひの外^{ほか}よ^よひ延^{のび}され。六^{ろく}月^{つき}も^も六^{ろく}日^ひた^たる。全^{ぜん}体^{たい}を^出
ゆ^ゆ。う^うと^と取^うら^ねま^まと^と嘆^{たん}く向^{むか}へ親^{おやぢ}の膝^{ひざ}と^と容^{ゆる}く袴^{はかま}の穢^{けい}を^{すま}



うをうかべ。おひきと親子の行燈の火を搔くれば。五六も小勝をう。
さればやまとひづれ。寛鬼のみぞめ。がめがの惑ひよ。桶の内をゆく
と物の響きのちる。寛鬼小牛うとうがへともあれ甚しきりある。幸た
めをやさん跡。叮寧に吊べたよ。出であらためえせあらす。と奥へさらせる
謎。ひくろひづれ。今更か。ゆくの母へ出でて。いよいよか。安からず。と知るが。
討債見沐を頂下寒くあらぬ歯を。齧あめと門脇院。弥陀院と。
且く念じて。息残ゆ。現墓うたへ人の命。長病とうじひあがり。きみのひりと
あらざり。餘病や。發さう。危症ふ。どうや。詰一と信すか。うがの努ひ引
あらず。悶懃る世間の人のうら小鬼ぞ。四五六をまわすと。笑顔あくら
うら点頭。近く頃用の薄紙を剥ふる。顔の色もよくなはで。小
まけがきの舟ぬく。がこの後へ貸ねこそ。うぐりく二三升がくのひ。宋の中
峠の糞の澤山ゆうて。全み親子の飯を。食ふと忽地食傷。伸つ
死つ苦う。が。辛ぐ。とく愈す。されど彼飯粒が。老母の齶の虚入す。
とくくらる程出でし。薪の鹿牙を養歯ゆ。すれどもとくらしき。
眼忽地腫あぐく。疼痛甚し。口漱んとく様頬へ。すくす小這ひ出られ。
底裏の棗落す。脊を蹙むと苦と呼び。息絶うとどる程。全み脇て脅
蒼老の加減の湯葉を只一口飲一なれば直す。往生察する呼飯小中だ。
薪の鹿牙よ眼を破られ。親子のほどう。う。吾脩の氣と。苛く
みしん。末進を。が。責め。と。雨の漏り。ふくらぬ良。底裏を。腐肉と。棗を落して
育を。教。二教井氏の湯葉。まよ。終よと。やを。さきなれば。件の四人
うぶ母の讐敵。とく。全みが恨の涙りうともよ。まよ。た。物語り。と理
とく。と。彼もくれ。定業あらん。か。さうねく。人を恨む。とく。小寛賺と。

香苑院へ支ひたり。金銭の原涌物への命を換へし人殺の一の罪を犯す。
ありて獄屋より起きて。何の身を以て全般が負債を償へんか。苦に
威されし。三みりうとる小頭を搔き。世小食毒といふことある。飯小中止と
ひのをす。薪の鹿牙とく。跟を腫ら。檻小背を齧せし。薪薪と屋
主の罪よりあらど詮ど所啓菴老の方じらひかりやわらん。どうせものぞ
眼を解て。いみそそれハ僻言。米小嵐の糞糞を交す。舛同を偷む。米家の罪
思木を薪す。銀を腫く。薪屋の罪。檻の朽くと造つた。人よ傷た。
の屋主の越度ともつべ。ちゆ小彼幅終か長く苦惱をさせ。と忽化息を
流す。とくせん。それよ。匙よ妙する所。医师よなれて。醫す。とくせん。角くむ
疑ひに二入よ。医师の絶えらきゆく。ひよん。とくせん。と置か。角くむ
屋の水うり論。果へ打ひ。廻ゆ。四人か中一四五六を。諸肩組よ推隔。とくせん
け。證拠もうれり。争ふ。士贊をきくれば。とくせん。疑ひに三をん。
自餘人へとまわす。せう。莊役とおよひと似け。些へ年よ恥。とくせん。懲
されく額を折り。とくせん。とくせん。とくせん。とくせん。とくせん。とくせん。
かくもやう禍あくふづれを是と定んや。益うれ。同士贊をれうが。恨を
かくもだり。所詮ちのく和睦。誠を盡さ。全般よ。疑をく。面の身
所存り。と親辛が扇を笏よとく。は。とくせん。とくせん。とくせん。とくせん。
とくせん。点頭。莊役どく宣ふ。とくせん。とくせん。とくせん。とくせん。とくせん。
あらか。とくせん。今更どくも。かくも。損をうそりうれば。是まぢの貰を
なれ物す。盤帳をさらと消し。主人がまう帰らぬ。とくせん。櫛を
おりそ送りゆ。傭工買ひぬ當坐の合ひ。これよす。善根ゆ。とくせん。
いぐわ。とくせん。四五六小隣を拍り。くもくらひあふりのうみ。生人がが

あら私ども某が肩をいたどきる。善根うれさんばと莊役
どうよ早桶をば昇られど。挑灯引提て先立御道をあひね。醫師
どうへ天窓役寺すう迎の所化代よ宗旨の經文どうぬか。とづれと顛
頭を接しや天窓へ山くもあれ。医者小佛經誦うる。茶坊主よ引導を。
こうせとづれ難題く況僕らの年未療治。暇絶てほまふよそ。
大成論。十四經の假名附くとも。一行も端より讀む。このものもあらゆ。と
俊巡するを聽ぶとぞ。衆皆だき早桶のほとり近く撲地と引居めくよ
株吹龍斧右馬つて對す。亡者をねりてゆくからん。おひと素手うち
して。どうよみへきるべに。經をあらぐへ念仏くとも。題目うりとも唱ゆく。
どうとどそがまれ脱とゆくやらひくん。懷ゆく。手拭を額へ當てけざ
え。去られへりうる呵責す。經をばらぬ家うりとも。題目念仏があまく
葉種の同うく間を合せん。まへくと。そら喫た机のうへる。鐸ふとく。
ニツニツ四ツうち鳴ら。遠志參門。英芩半夏。細辛乾姜。肉桂
芳薬草。草朴地。黃大黃升麻。麻黃。甘草。廣東人參。
嘗て。こうかくじイカく。だのこうせうま。まあこらう。兎をさう。兎とく。うき
喝う宿よ四五六七。仏器花盆角机さへ。妙の敗器をあつ集めく。桶の上に括て
音。それへ亡者のこの年来。とさへやる物あれば。香花所へ進らる。まへく
ち八丁寺町よ。やくとある。裏屋山四五六。七堂峨羅具の灵場くとく
まへく。とあのが初をさへとおせば。ひと持ふ熊斧右馬つ諸肩入とて昇
あ。ぐふふあまの間よあらねど。門燎の焼ぬ親平が挑燈よ引そくて。皆りう
とも立せられがゆ。の母へゆるもゆ堪ぞ。障子の内うそと坐行出戯きも
と。ふくら。うるやこく。けゆ。物借す。與まぬのを。欲思ひ。人を欺詐ら。

百河後卷一
葉種の同うく間を合せん。まへくと。そら喫た机のうへる。鐸ふとく。
ニツニツ四ツうち鳴ら。遠志參門。英芩半夏。細辛乾姜。肉桂
芳薬草。草朴地。黃大黃升麻。麻黃。甘草。廣東人參。
嘗て。こうかくじイカく。だのこうせうま。まあこらう。兎をさう。兎とく。うき
喝う宿よ四五六七。仏器花盆角机さへ。妙の敗器をあつ集めく。桶の上に括て
音。それへ亡者のこの年来。とさへやる物あれば。香花所へ進らる。まへく
ち八丁寺町よ。やくとある。裏屋山四五六。七堂峨羅具の灵場くとく
まへく。とあのが初をさへとおせば。ひと持ふ熊斧右馬つ諸肩入とて昇
あ。ぐふふあまの間よあらねど。門燎の焼ぬ親平が挑燈よ引そくて。皆りう
とも立せられがゆ。の母へゆるもゆ堪ぞ。障子の内うそと坐行出戯きも
と。ふくら。うるやこく。けゆ。物借す。與まぬのを。欲思ひ。人を欺詐ら。

後の祟をつゝよせ。笛笛アたゞ四五六灯。年。嗚くと。はうせど。啓菴。高寺。
香附子木。香。当。帰。川。サ。黄。連。黄。芭。若。常。風。川。骨。没。藥。大。塗。黃。葉。九。散。丹。湯。生。姜。二。瓦。麻。法。
ぼうす。せんそり。ほ。ほ。そ。う。こ。う。ば。く。す。ん。そ。ん。た。正。う。せ。う。き。ま。う。か。い。ん。せ。ま。
豪。ひ。す。う。外。目。も。あ。う。ぞ。唱。る。声。み。け。か。ま。れ。く。老。の。誠。の。と。さ。ひ。ど。これ。と。り。
身。を。招。塊。遠。離。や。く。挑。燈。の。火。の。え。ゆ。る。ま。を。抗。く。う。は。嗚。く。と。嘆。が。
母。ゆ。よ。厭。鬼。見。あ。へ。ら。ん。全。双。目。今。帰。く。ま。た。セ。よ。是。え。あ。く。と。擧。起。され。て。
うち。筆。死。原。未。夢。欲。と。む。ま。ふ。これ。ゆ。も。あ。う。忙。然。な。ま。

古夢南柯後記卷之一終

